

多くの地域システムを対象にしたミクロだけでなくメゾレベルの支援プログラムが展開されるようになった。そのプログラムでは、参加メンバーが地域住民として、人としての尊厳の保持がなされ、他の住民とともに活動するという特徴を持っている。特に、そのプログラムの参加者は、利用者とと呼ばれる受け身の人ではなく、その人は自分のことをよく理解している専門家であり、それぞれ考えを持ち、他者と対等に、しかも共に協働する仲間であるとの考えを持っている。

本書では、読者はオープンダイアログ形式のコミュニケーションを、文字を読むという動作から体験することになる。読者には、本書を読み解く前に、副題でもある“会う・聴く・共に動く”多職種連携／チーム支援について事前に想定しておくことをお奨めする。文字は、読み手になんの障害物も与えず、ストレートにオープンダイアログを感じさせ、理解させるが、どの方法で、どの方向でその動作をするかについてはなら「指示」をしない。ただプロセスを歩むことを求めるであろう。

ならば、スーッと文字を追い、スーッと入ってきたものを感じるのが読者であろう。そこで、あえて読者が場面や状況、登場人物の特徴など想定しておく、体験がかなり立体的なものになるのではないかと考える。

例えば、人々に「会う」という交互作用の開始時に、他者の何を見、何に注目し、それらから連想しうる特定のものに焦点を当てるといった動作を読者はするのであろう。そのような想定を持って人が言葉を発するとすれば、それが人と「会う」ことであり、そのきっかけは何であるかが理解できるだろう。この場合、メンバーは、他者の動きを事細かく観察しているだろうか。彼らの反応を敏感につかみ取ろうとしているだろうか。それとも、何の束縛もなく、そこに存在し、自らの思いに忠実に従うだろうか。メンバーと対等であれば、共通の場での振る舞いができるのだろうか。

このような体験を許可してくれるのが本書であるような気がする。協働体制では、多専門職チームで取り組む課題、目標などがたくさんあるが、各専門職が視点、価値、人間の存在価値等を織り交ぜ、独自の専門性を主張することで、そこに交互作用が生まれ、その相乗効果を出すことになる。この体験はとても面白い。

協働するメンタルヘルス

“会う・聴く・共に動く”多職種連携／チーム支援

下平美智代著

金剛出版、四六判 224頁、3,520円、2024年4月刊

(ルーテル学院大学名誉教授) 福山和女

本書では、著者がフィンランドのケロプダス病院でのグループ支援、オープンダイアログに参加した時の体験から学んだことが、協働について考察するきっかけとなったと記されている。実践に基づいた協働の実態やその解説がとても興味深い。

精神保健の領域では、地域システムを中心に総合的包括的支援体制の構築を求めてきた。1970年代から精神障害者などへの支援展開の政策としてコミュニティメンタルヘルスが取り上げられ、なかでも